

ふるさとのお話

もり いなり もといちば 本市場の かさ守稲荷さん



△今でも白い石を借りる人がいます

本市場の法源寺の東側に、「かさ守稲荷さん」と呼ばれる神社があります。皮膚病やいぼができて困っている人がお祈りし、白い石を借りて病気の部分をなでると治るといわれます。今でも白い石は借りることができ、借りた人は倍にしてお返ししています。

熱を吸い取る白い石

今から300年ほど前のことでした。一人の旅の武士が米之宮浅間神社で大変な熱とはれものの痛みに倒れていました。

近所の人たちは手厚く看護しましたが、病気は重くなるばかりでした。

ある日、武士は村人に「私は数カ月前からこの病気にとりつかれ、江戸のかさ守稲荷におすがりしたいと念じて西国からここまでやって来た。昨夜、夢の中に女神が現れて『かさ守稲荷に一心に祈り、白い石を敷きつめた上で寝起きすれば熱は石が吸い取って全快するであろう』とお告げがあった。」と言いました。

村の人々は早速たくさん白い石を拾い集め、武士を寝かせました。す

ると病いは日一日とよくなり、武士は数日後、江戸へ旅立ちました。

何日か後、江戸のかさ守稲荷からご神体をわけてもらい、立ち寄った武士は、村人にほこらを建てて祭ってくれるように言い残して西国へ帰っていきました。

おかげで長生き



近くに住む高田茂さん(84歳)は「悪いところへかさ守稲荷さんの白い石をあてると治ると聞いてるよ。

ワシも小さいころよくお世話になったもんだ。おかげで長生きしてるよ。」と語ってくれました。

川底の石が数えられるほど美しい滝川の流に沿って、人々が住んでいたの、地名を滝川と呼ぶようになったものでしょう。

しかし、妙善寺の観音堂の棟札には「明暦3年藤沢村」とあります。滝川は、そのころ藤沢村と呼ばれたと思われませんが、一つの独立した村として取り扱われたかどうかは明らかではありません。

地名の由来

たき かわ
滝 川



富士のあゆみ

ちすい かりがねづつみ 富士川の治水と雁堤



△雁の群れの飛ぶ形

富士川は、江戸時代初めごろまで、加島平野を東南に向かって幾筋にも流れていました。たび重なる水害にくじけず、富士川の流れを変え雁堤(雁の群れの形の堤)を築いたのが、古郡重高・重政・重年の三代です。

古郡重高は、慶長17年(1612年)の洪水で新田を流され、富士川治水の必要を強く感じ、一番だし、二番だしを作りました。

重高の子、重政は、正保2年(1645年)に800町歩の新田開発に成功しましたが、万治3年(1660年)の洪水で開拓地のほとんどが流されてしまいました。

重政の子、重年も父の意志を継いで築堤に全力を尽くし、延宝2年(1674年)に雁堤は完成しました。

雁堤の土の量は一人が一立方尺の土を運ぶと延べ42万5千人かかります。

(文は、郷土史家鈴木富男氏の著書を参考にしています)

こちら編集室

「お便りコーナー」が終わりました。いくら首を長くしてもお便りがなく青ざめたこともありましたが、たくさんのお便りに感激したことも…。「お便り」は永遠に不滅です。